

R8(2026)年 共通テスト本試『うつほ物語』現代語訳

なかつた

仲忠(本文では「中納言」「君」)は、祖父が異国で天人たちより伝授された琴

とその奏法を、母(本文では「尚侍のおとど」)とともに大切に守り伝えてきた

「琴の一族」である。本文は、仲忠の妻(本文では「宮」)が娘(本文では「いぬ」

「見」)

を出産した直後の場面である。

りうかく

Ⅰ 中納言、「かの龍角は、賜はりて、いぬの

仲忠は、

「あの龍角(Ⅱ祖父から母へ伝わる名琴)をいただいて、いぬ(Ⅱ生まれたばかりの娘)の

まぼ

守りにしはべらむ」。

お守りにいたしましたよう(と仰る)。

尚侍のおとど、うち笑ひて、「いつしかとも、はた。

仲忠の母は、

ふっと笑って、

「(誕生したばかりで)早々にも、また。

さても、かやうの折には言ふやうかある」と

それにしても、このような(出産の)時には、(そのように)言い伝えがあるのか」と

のたまへば、

おっしゃると、

「おほかたのことは、いかがはべらむ。

(仲忠は)「世間一般のことはどうでしょうか。(存じません)。

ぞう

この琴の族ある所、声する所には、天人の翔りて

かけ

しかし、(この琴の一族がいる所、

琴の音がする所には、

天人が(降臨して)翔けてきて

聞きたまふなれば、添へたらむとて。聞こゆるなり」。

お聞きになるということなので、(いぬの誕生にあたり、天人の加護を)添えようと思って申し上げるのだ」(と答

ないしのすけ

尚侍のおとど、典侍して、大将のおとどに、

えた)。尚侍のおとどは、典侍(Ⅱ女官の一人)に命じて、仲忠の父に、

「かの、おのが琴、ここに要ぜらるめり。取らせむ」
あの、私の琴が、ここで必要とされるようだ。あげよう(と思う)「

と聞こえたまへれば、急ぎて三条殿に渡りたまひて、
と申し上げなされたので、(仲忠の父は)急いで 三条殿「夫妻の邸宅」へ行きなされて、

取らせておはしたり。

(その琴を)取らせていらっしやった。

2 三の宮、取りたまひて、中納言にさし遣りたまひ

三の宮「仲忠の妻の兄弟」が(琴を)お受け取りになって、仲忠に

差し出しなされた

つれば、唐の縫ひ物の袋に入れたり。児を懷に入れ
ところ、(琴は)唐物の刺繍のある 袋に入っている。(仲忠は)いぬを 懷に抱いた

ながら、琴を取り出でたまひて、「年ごろ、この手を
まま、琴を 取り出しなされて、 「長年、 この琴の奏法を

いかにしはべらむと思ひたまへ嘆きつるを。後は知ら
どのようにしましょう「誰に伝授しよう」と嘆いておりましたが。 後は(どうなるか)分から

ねど」などて、はうしやうといふ手はなやかに弾く。
ないけれども」などと言って、「はうしやう」という 曲を華やかに 弾く。

声、いと誇りかににぎははしきものから、また、
(その)音色は、とても誇らしげで 賑やかだけれども、 また、

あはれにすごし。よろづの物の音多く、琴の調べ
しみじみと、ぞっとするほど素晴らしい。あらゆる楽器の音色が多く(混じり合い)、琴と合唱した

合はせた声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり。
(ような大きな)音は、 目の前で 聞くよりも、 遠くで 響いている。

3 中納言、かかるべき曲を、音高く弾くに、風いと

仲忠が、このような(子の誕生に際して弾くのに)ふさわしい曲を、音高く弾くと、

風がとても

声荒く吹く。空のけしき騒がしげなれば、「例の、物、荒々しい音を立てて吹く。空の 様子が 騒がしげなので、」

いつものように、この琴は

手触れにくさぞかし。わづらはし」と思ひて、

(天変地異などの不思議な現象が起きて)扱いづらいよ。やっかいだ」

と、思ひて、

弾きやみて、尚侍のおとどに申したまふ。
弾くのをやめて、

母に

申し上げなさる。

「今、曲一つ仕うまつらむとすれど、ア騒がしければ、
もう一曲 演奏し申し上げよう と思うけれど、

(空が)騒がしいので、(弾くことが)

えなむ。これに御手一つ遊ばして、鬼逃がさせ
できません。 여기에、 あなた様の手で一曲お弾きになって、 鬼を退散させて

たまへ」と聞こえたまへば、
ください」 と申し上げなさると、

「イはしたなげにぞあめる」。

(母は)「(私が弾くのは)体裁が悪いように思います」(とおっしゃる)。

君、「仲忠がためには、これにまさる折なむはべる
仲忠が 仲忠にとっては、 これ以上の (演奏にふさわしい) 機会はないません」

まじき」と聞こえたまへば、

と申し上げなさったので、

ゆか

尚侍のおとど、御床より下りたまひて、
母は、 寝台の台座から 下りなさって、

琴を取りたまひて、曲一つ弾きたまふ。
琴を お取りになり、 一曲弾きなさる。

その音、さらに言ふ限りなし。

その音色は、

まったく

言い尽くせない(ほど素晴らしい)。

（こぞ）

中納言の御手は、おもしろく凝しきまで、

仲忠の

演奏は、

趣深く

険しいほどで、

雲風のけしき、色殊なるを、

雲や風の

様子が

異様になる（ほどだ）けれども、

お

この御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人

この（母の）演奏は、

病を持つ者も、

（何かを）恐れ、

悲しみに沈んでいる人

も、これを聞けば皆忘れて、おもしろく頼もしく、

も、これを

聞けば

皆（苦しみを）忘れて、楽しく（なり）

心も強く（なり）、

よはひさが

齡栄ゆる心地す。

寿命が延びるような心地がする。

かかれば、宮は、御琴を聞こしめしつれば、ただに

こういうわけで、

仲忠の妻は、

お琴の音を

お聞きになったとこ、

普段の

おはしつるよりも若やかに、わざをしつるとも

ご様子よりも

若々しく、

（出産という）大仕事を終えた後とも

おぼ

思されず、苦しきこともなくて起き居たまへり。

お思いにならず、

苦しいことも

なくて

起き上がった座っていらっしやる。

あ

中納言の君、「悪しかめり。なほ^d臥させたまひて

仲忠が、

「（起き上がるのは身体に）悪いようだ。まだ

横におなりになって

聞こしめせ」と申したまへば、

と申し上げなると、

宮、「ただ今は苦しいもあらず。この御琴を聞きつれ

仲忠の妻は、「少しも今は

苦しくはない。

このお琴を

聴いた

ば、苦しかりつるも、皆やみぬ」とて居たまへり。

ので、苦しかったことも、

皆なくなってしまう」と言って 座っていらっしやる。

女御の君・尚侍のおとど、「ウ風邪ひきたまひてむ」

自分の母と

仲忠の母が、

「風邪を

おひきになっちゃっただろう」

とて、騒ぎ臥せたてまつりたまひつ。
と言つて、騒いで（仲忠の妻を）寝かせ申し上げなされた。

琴は、弾き果てたまへれば、袋に入れて、
琴は、弾き終わりなされたので、袋に入れて、

みはかし

宮の御枕上に、御佩刀添へて置きつ。
仲忠の妻の枕元に、

守り刀を

添えて置いた。